

# 5 地域コミュニティにおける「民俗芸能×アート」の実践 ——三匹獅子舞をテーマにして

## 1 はじめに

私は福島県いわき市を拠点に、福島県内のいくつかの民俗芸能の担い手として活動するとともに、アートプロジェクトを主宰しています。県内の芸能の状況を見聞するなかで、もっとも継承の危機にさらされていると実感するのが三匹獅子舞です。

三匹獅子舞は、関東・甲信越・東北地方など東日本に広く伝わっている芸能で、室町時代末期～江戸時代初期にかけて姿を見せ始めるとされます。一人立ちの獅子舞で、獅子頭をかぶり、腹部に鞆鼓を付け、笛や太鼓などの伴奏に合わせて舞います。2匹の雄が1匹の雌を取り合うストーリー、あるいは親2匹と子ども1匹の親子の情愛を描くストーリーを持ちます。

いわき市では、かつては63ヶ所で三匹獅子舞が継承されていました。その後1987年に41ヶ所、2019年に32ヶ所となり、コロナ禍をへて10ヶ所以上の地域で中断しました。コロナ禍の前から継承が厳しかった所が中断に至っているようです。

本稿では、三匹獅子舞の継承を活性化すべく実施した、いわき市平下高久のアートプロジェクトの実践例を紹介します。

## 2 プロジェクトの舞台について

### (1) 下高久の環境

下高久は太平洋沿岸部に位置し、502世帯1,439人（2024年4月現在）が暮らす地区です。古くから米作りを中心とした農業が盛んな所で、昭和初期までは酒造業者が集まる土地でもありました。中心市街地から約8kmの距離で、市街化調整区域のために農地を宅地に転用することができず、新しい住民が入りにくい地域でもあります。子どもの数は30年前に比べると半減しています。

### (2) 芸能の概要

下高久の三匹獅子舞は江戸時代に始まったと伝えられています。現在は毎年9月14日～16日に近い土日に行われる八幡神社・八剣神社・二荒神社の例大祭で、五穀豊穡や村内安全などを祈って奉納されます。成年男性による舞いのほか小学生による棒術や手踊りも行われます。福島県指定重要無形民俗文化財です。

継承の母体は下高久区で、地区内の6つの集落を3グループに分けて輪番で祭りの催行を担当します。催行にあたっては当番集落で執行委員会が組織され、常会・青年会・婦人会・子ども会・氏子総代・師匠（舞い・笛・棒術・踊り）・消防団などの複数の会が集まります。舞い手は当番集落から選ばれ、集落の住民には負担金や準備物の製作が割り当てられます。

課題はやはり後継者問題で、舞い手の成年男性



下高久の位置



下高久の三匹獅子舞

が確保しにくく棒術などを担う小学生も減少しています。また、時代の推移とともに芸能に対する理解や熱意が薄れ、参加を厭う層が一定数あることも課題に挙げられます。

### 3 アートプロジェクトの実践

#### (1) 企画者および目的について

課題にアプローチするため、アートプロジェクトが企画されました。主催団体はTSUMUGUプロジェクト実行委員会で、これは2011年に福島と東京のメンバーが立ち上げた「民俗芸能×アート」をコンセプトに活動する任意団体です。コーディネーターは実行委員会の代表かつ下高久の住民である私が担当しました。

プロジェクトの目的は、①新しい取り組みの先例を作る、②視点を変える・入り口を増やす・裾野を広げるなど残していくための選択肢を提示する、③外部との関わりを持たせることで私たちの獅子舞を客観視する機会を持つ、です。特に、地区内で完結していた祭りに外からの視線を入れて（ただし観光化には結び付けません）ネットワークの下地を作っておくことは、将来何かの役に立つであろうとの期待がありました。

主なプロジェクトは次の3点です。参加アーティストは県外より招聘しました。

#### (2) 記録制作プロジェクト

映像作家・写真家による、祭りを撮影・記録するプロジェクトを実施しました。

##### ■期間・回数

- ①2010年9月、②2012年9月、③2013年9月、  
④2016年9月、⑤2019年9月

##### ■参加アーティスト

映像作家4名、写真家2名

##### ■主な資金源

企業系財団の助成金、東日本大震災被災地支援の助成金、自己資金

##### ■内容

祭りや準備の撮影のほか、宮司・氏子総代・師



映像作家による舞いの師匠へのインタビュー

匠など関係者にインタビューしました。成果物はDVDにして関係者に渡したほか、映像の一部をYouTubeなどのWebで公開しています。

##### ■振り返り

地区住民の広い協力が得られ、スムーズに進みました。それまで外からの見学者はほとんどなく、映像作家や写真家なども来たことがなかったため、注目されて嬉しいという声が聞かれました。外部からの関わりに刺激を受ける関係者が想定以上に多く、来訪者に慣れるというステップを踏めた点でも効果があったと捉えています。

#### (3) 獅子頭を創るワークショップ

祭りに参加する小学生15名を対象に、夏休みにワークショップを実施しました。

##### ■期間・回数

- ①2014年8月

##### ■講師

下高久の地区住民1名、女子美術大学アート・デザイン表現学科の4年生5名

##### ■主な資金源

企業系財団の助成金、自己資金

##### ■内容

子どもたちには制作を始める前に「家族に獅子舞の話聞いてくる」という宿題を出し、昔の写真や映像があれば持参してもらいました。それらを見ながら講師から獅子舞の説明を聞き、獅子頭



「マイ獅子頭」を創る様子



マイ獅子頭をつけてダンスを奉納

の構成や使われている素材を観察するという事前準備をしました。

獅子頭づくりは麦藁帽子にデコレーションしていくことにし、材料になりそうなものを用意して好きなものを使うよう促しました。出来上がった獅子頭には魂を入れるパフォーマンスの儀式をし、集会所に飾って訪れる住民たちに見てもらえるようにしました。

#### ■振り返り

企画者としては、子どもたちに獅子舞をより深く理解してもらいたい、芸能の道具を少しでも身近に感じてもらいたいとの意図がありましたが、具体的な効果の検証まではできませんでした。

#### (4) 獅子舞ダンスの奉納

獅子舞をモチーフにした新しいダンスを創作し、祭りで奉納しました。

#### ■期間・回数

①2014年9月、②2015年9月、③2018年9月

#### ■参加アーティスト

コンテンポラリーダンサー1名

#### ■主な資金源

企業系財団の助成金、自己資金

#### ■内容

小学生は祭りで棒術や手踊りを奉納するため、通常10日間、1日につき2時間の練習が設けられます。同じ期間にコンテンポラリーダンサーと小学生と一緒にダンスを制作しました。毎日30分

～1時間程度のワークショップを重ね、唄が入る演目の歌詞の意味を考えたり実際の舞いを見たりしながら全員でダンスを考え、完成した作品を祭りで奉納しました。

#### ■振り返り

初年度の2014年は、関係者（神社・氏子総代・区長・執行委員長・師匠・保護者など）の許可と了承を得ながら進めましたが、地域の反応は賛否両論で、50代以上の男性にはおおむね好評、60代以上の女性には不評、保護者は静観でした。特に姑の立場の女性陣からは反感が出ました。背景に、女性は祭りでは裏方に徹するのが慣例だったにもかかわらず女性である私が祭りの表舞台に出てコーディネートをすることに対する反発、前例のない獅子舞ダンスをやったことへの反発、私との関係性（昔からよく知る隣近所であるという距離感、私が彼女らより年下であることなど）による不満のぶつけやすさ、があったと理解しています。一部の女性陣からは執行委員会にクレームが入り、私の家族には辞めさせるよう圧力がかかり、練習中に強い調子で厳しい言葉が投げかけられるなど、緊張感がともなう場面も出ました。執行委員長と信頼関係が築けていたため最後までやり通すことができ、その後も2回、執行委員会から同様の企画の依頼がありました。

住民の不満が出たことは、祭りを維持してきた地域コミュニティの仕組み、つまり組織立てられていない微細なコミュニティ（分断すら生じさせ

るグループや派閥)の共存が可視化されたということで、大事な気付きになりました。プロジェクトの進め方を誤ると、祭りや芸能の継承に影響を及ぼすほどの問題を引き起こす可能性があることを学びました。

## 4 コーディネーターに求められるもの

アートプロジェクトは埋もれている価値を顕在化させ、新しい価値を創るとともに、多種多様な人々を巻き込む装置になります。民俗芸能を継承していくには、裾野を広げて直接的にも間接的にも携わる人を増やすことが急務です。その間口を広げフックを作るためにアートは有用で、「民俗芸能×アート」の企画は全国各地で行われています。

そこで鍵となるのがコーディネーターの存在です。コーディネーターに求められるものはいろいろありますが、その一部を下記にまとめてみます。

### ■地域の特性を理解する

プロジェクトを展開する地域がどのような場所でどういった歴史があるのか、都市部／農村部／山間部／城下町／港町／街道筋など、その立地や気候を含めた特色を押さえることは必要なことだと思います。つまり、芸能が継承されてきた背景を知ることです。

### ■芸能の来歴を理解する

芸能の基本的な概要はもちろん、どんな人たちが担い手になり、それはどう変わってきたのかのリサーチは必要不可欠です。自治体史を確認したり、地域住民に丁寧にヒアリングをしましょう。あわせて、地域や芸能が今どんな課題を抱えているかについても聞き取るとよいと思います。

### ■継承についての様々な事例を知っている

全国各地の継承の事例やプロジェクトの事例の知識があると、プロジェクトを企画する際に役立ちます。

### ■指定文化財の確認

企画の内容によっては、それまでの芸能の在り

方を意図的に変えることに繋がります。指定文化財の場合はどこまでのことをして良いのか、確認しておくとも良いかもしれません。

### ■地域コミュニティにしこりを残さない配慮

芸能にフォーカスすると、地域の中の間人間関係を含む複雑な事情に触れることがあります。住民あるいは関係者同士で、芸能に対する向き合い方や大事に思うものの中身、日常生活における優先順位が必ずしも同じであるとは限りません。継承団体の代表など窓口となる人が乗り気であっても、団体や地域が一枚岩でない場合もあります。きめ細やかな配慮が必要です。

### ■地域への悪影響も考えておく

アートプロジェクトを実践することによる地域への悪影響に考えを巡らしておくことも大事だと思います。起きたことの余波を引き受け、後始末をするのは最終的に地域住民です。コーディネーターが地域外から参加している場合、プロジェクトが終了すると来なくなるケースがありますが、負の余波に気付かず結果として地域コミュニティを掻き回して去っていくなど、ともすると無責任に見えてしまう場合もあります。地域や芸能を搾取・消費しない誠実さが問われます。

## 5 まとめ

民俗芸能は、長い年月をかけてたくさんの先人たちによって育まれてきた私たちの文化遺産です。繋いできてくれた人々への敬意を持ち、アートによるクリエイティブな視点を取り入れて人々が活性化する仕掛けを創り、潜在的な価値や新たな価値を見出していく、そんなプロジェクトが今後も各地で実践されていくことを期待しています。

(田仲 桂)